

保育者養成における音楽授業科目に関する一考察 (1)

— 本学の初年次音楽教育カリキュラムの比較を通して —

A Study on the Curriculum of Music Education in Nursery Training (1)
— Through Comparison of Our Old and New Curriculum for the First Year Students —

伊藤 仁美¹⁾・葛西 健治²⁾・多賀 洋子³⁾・今川 典子⁴⁾・嶋田 陽子⁵⁾
ITO, Satomi・KASAI, Kenji・TAGA, Yoko・IMAGAWA, Noriko・SHIMADA, Yoko

Abstract

The purpose of this paper is to analyze and consider the curriculum of music education in Hosen College of Childhood Education. It has been inspected in the past papers and articles enough about junior college era, but this is because inspection is not accomplished after it was reorganized by the four-year college. What kind of music class subject is necessary to bring up the childminder who we sympathize with the music expression of the infant, and can increase the expression of the infant? We focused on a class of the first time annual education of the college particularly “Music Practice (Basic)” in this paper and considered the comparison of the music class subject for the junior college era and the class subject of the current college. A result, various things became clear. At first, the first is that beginners of the 2014 student increases in comparison with a 2006 student. Because the second did not standardize a set piece raw in 2006, a considerable gap was born between charge teachers about unit authorization, and the equalization of the evaluation was kept, and meat suffered. However, we make “a learning chart of BEYER and more”, and it can say besides that unit authorization passers increased by having done correspondence depending on individual ability of the each student. We want to work for the administration of the music class subject that we continue studying it, and can bring up the cause of the aim that the curriculum tree of the music class subject of this college is clear, the rich musicality of the student in future.

キーワード：保育者養成、器楽（ピアノ）、音楽カリキュラム、保育表現技術（音楽）

1. はじめに

本学の前身である宝仙学園短期大学は80年余り保育者の養成に携わってきたのち、改組を行い、平成21年（2009年）4月に4年制のこども教育宝仙大学を開学、平成25年（2013年）3月には第1期生を社会に送り出した。今後益々現場で活躍することのできる、豊かな音楽表現力を備えた保育者を輩出するべく、日々養成にあたっている。

短期大学時代、本学の音楽授業科目が何をねらいとし、どのように構成されたカリキュラムの中に位置付けられてきたのか、また授業内容がどのような変遷を経て改革されてきたのか等については、複数の論文によって十分に検証されている（小林 1982、小島 1989、西海ほか 2007、

西海ほか 2008）。しかし、4年制大学に改組されてからの、本学における音楽授業科目のカリキュラム編成および実践研究については、まだ検証がなされていない。

幼児に音楽の楽しさや表現することの喜びを伝えることが出来、また幼児の音楽表現に共感し、幼児の表現の芽を伸長させることの出来る保育者を養成していくためには、本学の音楽科目はどうあるべきか。大学としての開学4年目にあたる平成25年（2013年）に完成年度を迎え、あらたな一歩を踏み出した今、現状を把握し継続的に検討を行う必要があると考えられる。

本学のアドミッションポリシーに「表現系の教科（音楽・美術・体育など）についての基礎的な素養とそいづれかについての積極的な関心が求められる」¹⁾とあるように、豊かな感性や表現力を備えた保育者の養成は、本学の人材育成における重要なミッションの一つである。

以上のことから、保育実践において必要とされる音楽表現技術を習得することが出来、本学が望ましいと考える保育者の養成に繋がる音楽授業科目のカリキュラム内

1) こども教育宝仙大学 准教授
2) こども教育宝仙大学 専任講師
3) こども教育宝仙大学 非常勤講師
4) こども教育宝仙大学 非常勤講師
5) こども教育宝仙大学 非常勤講師

容の在り方について検証し、考察を加えることを本稿の研究目的とする。尚、本研究は継続的に実施することとし、第一稿となる本稿では、本学の初年次教育に設置されている音楽授業科目に焦点を絞ることとする。その中でも特に、鍵盤楽器を通して保育表現技術を学ぶ、本学開講の「音楽演習(基礎)」と、短期大学時代開講の「基礎音楽(ピアノ実技)」のカリキュラム内容を比較検討しながら、本研究を進めていくこととする。

2. 宝仙学園短期大学とこども教育宝仙大学における音楽関係授業科目の比較考察

宝仙学園短期大学ではどのように音楽授業科目のカリキュラムが配置され、授業が行われていたのだろうか。このことについて、はじめに概観しておく必要があるであろう。当時のカリキュラムは表1の通りである。

表1に示されているように、1年次には一般教育科目として「コーラス」(通年、2単位)、器楽関連科目として

「基礎音楽(ピアノ実技)」(前期、1単位)、音楽表現法Ⅰ(後期、1単位)、ピアノ特別レッスン(後期、単位外科目)が開講されていた(西海ほか 2007: 33)。年次をまたぐものとして、声楽関連科目の「音楽表現法Ⅱ(声楽)」(2年通年、1単位)が、また2年次には器楽関連科目として「音楽表現法Ⅱ(音楽演習)」(通年、1単位)、表現関連科目として「保育内容Ⅲ(子どもと文化1音楽)」(前期、1単位)、「保育内容Ⅲ(子どもと文化2音楽)」(後期、1単位)が開講されていた(西海ほか 2007: 33)。西海ほか(2007)は、「2年制の保育者養成校として、ある程度充実した科目数と時間数を有している」と述べているが、これは幼稚園教諭二種免許状および保育士資格取得に要する最低単位数が、教科に関する科目の場合4単位であることに對し、当時の短期大学における音楽授業科目の単位数は、この最低単位数をかなり上回っていたことがその根拠であると思われる²⁾。

次に、現在本学において開講されている音楽授業科目を整理してみたい。カリキュラムは表2の通りである。

表1 宝仙学園短期大学における音楽授業科目(西海ほか 2007: 34)

	1年次		2年次	
	前期	後期	前期	後期
一般教育科目	コーラス：2単位			
器楽関連科目	基礎音楽 (ピアノ実技) ：1単位	音楽表現法Ⅰ (音楽実技)：1単位 ピアノ特別レッスン ：単位外科目	音楽表現法Ⅱ(音楽演習) ：1単位	
声楽関連科目	音楽表現法Ⅱ(声楽)：1単位			
表現関連科目			保育内容Ⅲ(子どもと文化1音楽)：1単位	保育内容Ⅲ(子どもと文化2音楽)：1単位

表2 こども教育宝仙大学における音楽授業科目

	1年次		2年次		3年次		4年次	
	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期
器楽関連科目	音楽演習 (基礎) ：1単位	音楽演習 (応用) ：1単位 音楽演習 (基礎) 再履修 ：1単位	器楽演習 (基礎) ：1単位	器楽演習 (応用) ：1単位				
声楽関連科目	声楽 (基礎) ：1単位	声楽 (応用) ：1単位						
表現関連科目					音楽表現 指導法演習 ：1単位	リトミック ：1単位		リトミック ：1単位

ここで、西海ほか (2007) で記されていた当時 (宝仙学園短期大学時代。以下、短大時代と略称。) の音楽授業科目と、現在本学で開講されている音楽授業科目とを照らし合わせてみたい。

短大時代、1年次前期に行っていた「基礎音楽 (ピアノ実技)」では『バイエルピアノ教則本』『ブルグミュラー25の練習曲』『ソナチネアルバム』『ソナタアルバム』等を教材として使用、授業形態は個人レッスンを軸としたグループレッスンであった、と記述されている (西海ほか 2007: 34)。これは現在、本学の1年次春学期に開講している「音楽演習 (基礎)」のカリキュラム内容に引き継がれている。また、短大時代に実施されていた、鍵盤楽器の演奏能力レベルに応じたクラス分けについても、本学における1年次秋学期開講「音楽演習 (応用)」の授業に踏襲されている。クラスの総数は短大時代が3クラスであったのに対し、本学では1クラス増えて4クラスとなっている。クラス分けの実施に関しては、鍵盤楽器の学習能力が短大 (大学) 入学以前の個人による音楽経験の有無によって大きく相違してくることと、一人ひとりの学生が自身の能力を発揮し、能動的に学ぶことが出来る学習環境を設定するためになされるものである。

短大時代の1年次後期に開講していた「音楽表現法 I (音楽実技)」は、本学の1年次秋学期に開講している「音楽演習 (応用)」の授業に相当する。短大時代の「音楽表現法 I (音楽実技)」の授業では音程、音階、和音、コードネーム等、基礎的な音楽理論を学習し、主要三和音と属七の和音を使用した和声進行と簡単な伴奏法を学習し、子どもの歌の簡単な弾き歌いを実践する、とある (西海ほか 2007: 35)。本学の「音楽演習 (応用)」では、子どもの歌のレパートリーを増やすことと、各々の音楽能力に合ったピアノ曲を滑らかに演奏できるようになることに主眼を置いている。授業内容の骨子については「音楽表現法 I (音楽実技)」との間には大きな相違がないように思われるが、一点、現在開講されている「音楽演習 (応用)」の授業運営に当たって、短大時代から大きく変化し、また改善されたポイントがある。

現在は「音楽演習 (応用)」つまり1年次の秋学期から音楽理論の学習を始めるのではなく、春学期開講の「声楽 (基礎)」において、楽典のドリル (坪野 2013) を副教材としながら、基礎的な音楽理論の学習を導入しているのである。すなわち器楽関連科目に留まらず、「声楽」を含めた音楽関連科目の教員が連携を図りながら、「音楽演習 (基礎・応用)」での器楽 (ピアノ) の学習がより深化されるよう努力、工夫がなされているのである。

この背景には、短大時代には非常勤講師が担当していた声楽関連科目を、本学においては専任講師が担当するようになったという事情がある。更には3・4年次に開講

されている「リトミック」に関しても、それを専門とする専任教員が授業を担うという理想的な環境が整えられている。「声楽 (基礎・応用)」「リトミック」と、器楽関連科目以外の音楽科目に2名の専任教員が配されることにより、「音楽演習 (基礎)」を始めとする器楽関連科目の学習についてはより包括的、複合的な観点から授業内容を見渡すことが可能となっている。

3. 平成18年度 (2006年度、短期大学時代) と平成26年度 (2014年度、4年制大学移行後) の初年次 (前期 = 春学期) 器楽関連科目の比較考察

ここでは本学の初年次音楽科目のうち、春学期実施の「音楽演習 (基礎)」について検証を試みる。現行のカリキュラムの意義を明らかにするためには、過去のカリキュラムとの比較分析が有効であると考え、西海ほか (2007) における「基礎音楽 (ピアノ実技)」についての内容、また平成18年度 (2006年度) 入学生にまつわる諸データとの比較をもって検証を進めることとする。

3.1. 新入生入学時 (4月) におけるピアノ学習経験

始めに西海ほか (2007: 40-43) のデータを基に、新入生入学時 (4月) におけるピアノ学習経験を比較したものを表3に示す。

表3に示されているように、上級者の割合は平成18年度 (2006年度) 入学生 (以下、H18年生) が3.8%、平成26年度 (2014年度) 入学生 (以下、H26年生) は2.8%と、さほど大きく変化してはいない。

中級者はH18年生が43.6%、H26年生は25.0%と、明白に減少傾向にあると言える。

最も変化が顕著なのは初級者の割合である。H18年生は52.6%だったのに対し、H26年生は72.2%と著しく増加している。初級者増加分に当たる約20%という数値は、中級者減少分の割合とほぼ一致している。H26年生については、4人のうち3人がピアノの初心者、という状況である。

初級者の比較の中でも特に注目されるのは、最もボトムに当たる「1. 学習経験なし～バイエル44番」の数値である。H18年生は16.6%であったのに対し、H26年生は41.7%と、2倍を大きく上回る増加が示されている。この8年間での本学入学者の変化の特徴を示す、極めて有意な分析結果である。

4年制の本学におけるピアノ未経験者の増加は、大学全入時代、すなわち、少なくとも8年前には大学へ進学していなかったと考えられる学生層が大学へ進学するようになったという、日本全体の傾向の一端を示している

表3 新入生入学時(4月)におけるピアノ学習経験の比較

グレード	ピアノの学習経験	平成18(2006)年 入学時		平成26(2014)年 入学時	
初級	1. 学習経験なし～バイエル44番	13 (16.7)	41 (52.6)	45 (41.7)	78 (72.2)
	2. バイエル45番～65番	8 (10.3)		20 (18.5)	
	3. バイエル66番～84番	10 (12.8)		3 (2.8)	
	4. バイエル85番以上	10 (12.8)		10 (9.3)	
中級	5. 『ブルグミュラー25の練習曲』程度	19 (24.4)	34 (43.6)	20 (18.5)	27 (25.0)
	6. 『ソナチネ』前半程度	15 (19.2)		7 (6.5)	
上級	7. 『ソナチネ』後半以上、『ソナタ』程度	3 (3.8)	3 (3.8)	3 (2.8)	3 (2.8)
計		78		108	

・表内の数値は左が人数、括弧内が% (小数点第2位以下は四捨五入) を示す。なお、表4、5における数値もこの凡例に従っている。
 ・西海ほか(2007)では、表2については昭和62(1987)年のデータとの比較のために、グレードの区分が4段階とされているが、表3では同様のデータが7段階に細分化されている。
 本稿では詳細な比較を行うために、後者の7段階を採用してデータの整理・収集を行った。
 ・「平成26(2014)年入学時」のデータは、平成26年(2014年)4月11日の初回授業後、担当教員4名(葛西、多賀、今川、嶋田)によって集計されたものである。

とともに、本学の学生募集の方針によるところも大きいように思われる。本学では受験生に対し、入学前のピアノ等の音楽経験の有無を問わず、たとえ初心者であっても音楽に対して意欲関心を持ち、積極的にピアノ学習に取り組む姿勢を備えていることを重要視した学生募集を行っている。この方針は全教職員の共通理解の下、オープンキャンパスや入試相談会等の学生募集活動において明確に打ち出されている³⁾。

3.2. 授業の概要——短大時代：基礎音楽(ピアノ実技)と本学：音楽演習(基礎)

続いて授業の概要について考察を進めたい。

基礎音楽(ピアノ実技)の授業内容については西海ほか(2007: 34-35)を参照し、必要に応じて適宜引用する⁴⁾。音楽演習(基礎)については本学発行の『26年度シラバス』(43頁)から同様に適宜引用し、双方を比較しながら考察していくこととする。

まず、授業のねらいであるが、基礎音楽(ピアノ実技)(以下、基ピ)では“ピアノ音楽を通してピアノの演奏技術を高めると共に、保育に必要な音楽能力の育成をねらいとする”とある。一方、音楽演習(基礎)(以下、音基)では、“幼児の音楽活動を支えるために必要なピアノ演奏の表現技術修得”が授業の到達目標とされている。双方の内容に大きな違いはないように思われるが、音基では“幼児の音楽活動を支えるために必要な”という前提が第一に置かれ、当該授業によって養われるピアノ演奏能力が「保育技術の一つ」であることがより明確に示されている。

担当教員数はいずれも4名と共通である。

時間数は1コマが90分間で、前期=春学期を通して15回開講と、こちらも相違はない。

使用教材については、基ピでは例として10種挙げられているが、代表的なものとしては『バイエルピアノ教則本』『ブルグミュラー25の練習曲』『ソナチネアルバムⅠ・Ⅱ』と、いずれも伝統的に日本の保育者養成校で使用されてきた教材が含まれており、現行の音基の実態とほとんど相違はないようである。使用教材は以上の代表的な教本をベースに、学生個々のピアノ技術や進度に合わせて教員が適宜選択して指示をする、というのが、基ピ、音基に共通した実態である。

さて、担当教員数はいずれも4名と共通であったが、それぞれの担当学生数については差異が見られる。また学生1人当たりの個人レッスン時間を算出して比較すると、そこには明らかな相違が見られる。

基ピでは1人の教員が1クラス10～11名を担当していたとされる⁵⁾。授業1コマは90分間であったが、“保育実習⁶⁾対策として、授業開始後10分間に「手遊びの時間」を設けて”いたため、個人レッスンに当てられる時間は差し引き80分間であったと考えられる。これを学生1人当たりのレッスン時間に換算すると、約7分半となる。

一方、音基の1クラスの人数は“8人程度”とされ、8年前よりも更に少人数制の充実が図られていることがわかる。H26年生の実態としては、教員は1クラス当たり平均9名の学生を担当していたが、基ピのようにクラス全体で毎時間実施するような授業内容は組み込まれておらず、1コマの90分間はほとんどロスなく個人レッスンに当てられていた。基ピと同様に学生1人当たりのレッスン時間を換算すると、音基では平均10分間、個別レッス

ンを実施できていた計算になる。

基ピと比較しての時間の差は僅か2分半余りであるが、その間には弾き直しの指導や詳細なアドバイス、教員による模範演奏の例示、必要に応じた楽語や音楽記号の教示等が可能となり、毎回の授業で一人ひとりに「プラスαの指導」を実現できる、貴重な時間となり得るものである。

3.3. 前期＝春学期終了時（7月）のピアノ進度

3.3.1. 「音楽演習（基礎）学習チャート」及び到達目標（合格ライン）の変更について

前期＝春学期終了時（7月）のピアノ進度の比較に先立って、音基に適用されている「音楽演習（基礎）学習チャート」について概説しておきたい。

次の資料1は、初回の音基において、1年生全員にプリントとして配布されるものであり、当然ながらH26年生もその適用対象である。

『バイエル』の原書には106番までのピアノ練習曲が掲載されている。しかしながら半期15回という限られた授業回数の中では、106曲全てを網羅し、学習することは大変困難である。そのため、基ピではそれぞれの担当教員が『バイエル』から任意によって課題曲を選定していたが、その曲数には相当のバラつきが見られ、また選定の基準も曖昧であった。平成22年度（2009年度）の本学開学時には、短大時代の基音の授業運営がほぼそのまま踏襲されていたが、課題曲選定数の多いクラスからは再

履修者が多く出され、反対に課題曲選定数が絞られたクラスからは数名しか再履修者数が出ない、というように、クラス（担当教員）の違いによって学生の学習進度に大きな歪みが生じる事態となった。

そこで到達目標の平準化という観点から改善が試みられ、音楽授業科目担当者間で協議が重ねられた結果、平成22年度（2010年度）より「音楽演習（基礎）学習チャート」が作成され、施行されるようになったのである。

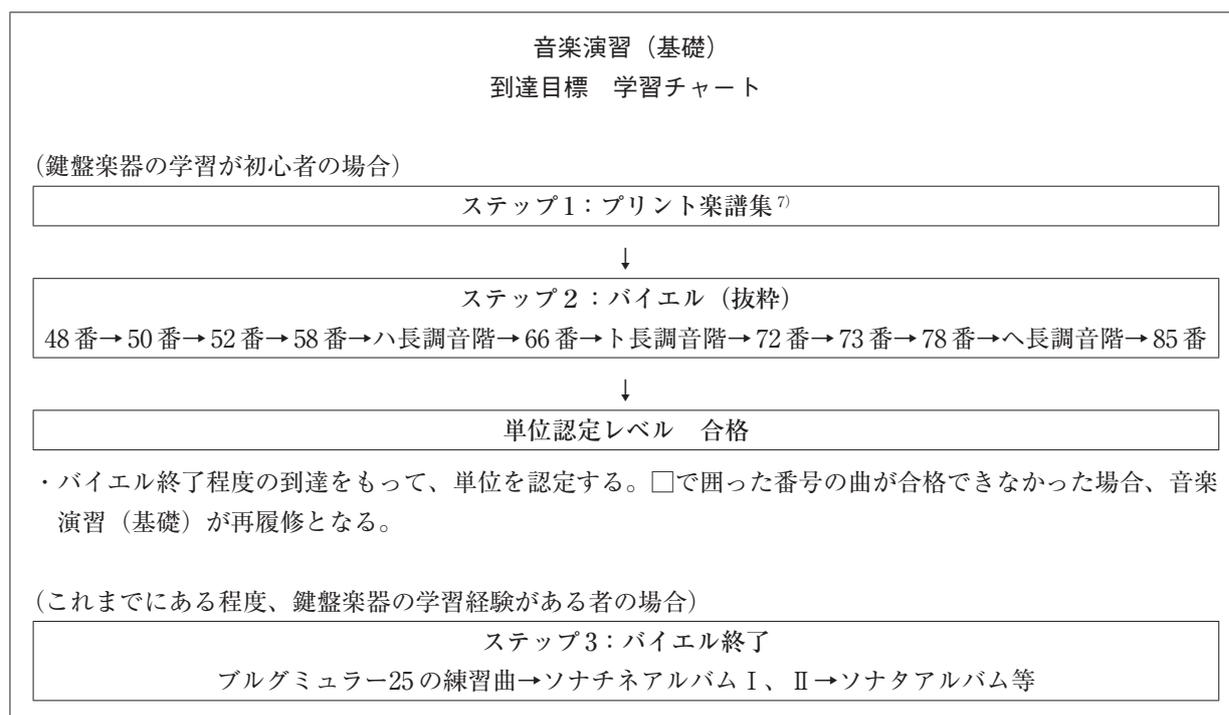
学習チャートのステップ2に抜粋された48番から85番までの12曲（練習曲9曲、音階3種）は、本学が独自に選定した『バイエル』における必須課題曲である。それまで担当教員の裁量に任されていた『バイエル』の選曲は「音楽演習（基礎）学習チャート」の施行以降、この12曲に統一されることとなった。

ここで、選定した9つの練習曲について、その特徴や学習上のねらいを述べておきたい。

48番、50番、52番、58番の4曲はいずれも『バイエル』の初歩段階に特有の、両手が高音部譜表（ト音記号）によって書かれた曲目である。学習初期の段階では、左手における低音部譜表（ヘ音記号）の読譜に同時に取り組むよりも、第一に高音部譜表に慣れ、その読譜を確実に習得することが重要である。

高音部譜表の読譜に十分慣れたところで、学習はいよいよ、左手がヘ音記号で記譜された66番へと進む。この曲は左手の伴奏型の分散和音が子どもの歌《思い出のアルバム》と同様であり、子どもの歌の伴奏法の習得へ向

資料1 H26年生に配布した「音楽演習（基礎）学習チャート」プリント



けて、応用が期待される曲である。

72番では重音で弾く音型を右手、左手の双方で学習することができる。

73番では半音階奏法に慣れ、また臨時記号の読譜を習得することができる。音楽的にも表情豊かな佳曲である。

78番は左手の分散和音、右手の重音奏法によって曲が進み、中間部には保続音の奏法が含まれている。初心者にとってはやや難易度の高い曲であるが、保育者に必要とされる基礎的なピアノ奏法がふんだんに盛り込まれており、学習する価値の大きい曲の一つである。

85番は66番と同様に、分散和音が右手、左手で交互に演奏される曲である。

ステップ2はこの85番をもって終了となるが、この曲を到達目標、つまり音基の合格ラインの曲として決定するまでには、担当者間で何度も協議が行われた。最終的に85番を合格ラインとして位置付けるに至った根拠は、次の2点にある。

まず「ハ長調」「ト長調」「ヘ長調」「ニ長調」の4つの調性が、85番以前の選定曲において網羅されていることである。これらの調性は子どもの歌に頻繁に用いられるもので、1年次春学期のうちに必ず一度は触れておきたい調性として、担当教員の意見が集約されたものである。

また86番以降の主要な練習曲の演奏に必要なとされる「曲想を感じ取りながら表現豊かに演奏する」というねらいは、音基以降の音楽授業科目において『バイエル』以外のピアノ曲教材を通し、継続的に習得を促していけるものとして判断、合意がなされた。

85番終了後はステップ3の『ブルグミュラー』へと指導を展開していくことが可能であるが、担当教員の裁量によって、引き続き『バイエル』から課題曲を与えることも許容されている⁸⁾。

いずれにせよ音基では、学生一人ひとりの能力に応じて適切に課題設定を行い、保育者に必要とされるピアノ演奏技術を無理なく習得させることを授業運営の要としているのである。

3.3.2. 「ピアノ特別レッスン」(H18年生対象)と「音楽演習(基礎)再履修」(H26年生対象)について

ここではH18年生に設定されていた「ピアノ特別レッスン」(以下、ピ特)とH26年生に設定されている「音楽演習(基礎)再履修」(以下、再履修)の内容とねらいについて記述したい。

ピ特では前期末試験でのバイエル未終了者、つまり表3における「グレード4以下」の学生がその受講対象者となっていた。授業回数は半期分に相当する15回が組まれ、受講学生は原則として全ての回への出席が義務付けられていた。課題曲の選択は、基ピと同様に、それぞ

れの担当教員に委ねられており、仮に途中で『バイエル』が終了した場合は、教材を『ブルグミュラー』へ移行して、15回目の授業が終わるまで指導が継続されていた。

一方、再履修では少し事情が異なっている。

再履修の受講対象者は、音基の期末試験時に「音楽演習(基礎)到達目標学習チャート」のステップ2の最終曲『バイエル』85番に到達しなかった学生である。言い換えれば85番に到達した学生はボーダーラインでの合格者ということなり、それ以下の学生、すなわち表3の「グレード3以下」の学生が再履修の受講対象者となるのである。

再履修は音基と同様に『バイエル』85番の合格を到達目標としており、その目標が達成された時点で該当学生の授業を個別に終了させている。例えば音基の期末試験で78番を弾いた学生の場合、再履修で残されている課題はヘ長調音階と85番の2曲のみとなる。またそれ以前の曲、例えば66番を期末試験で弾いた学生の場合、チャート内の66番以降の全曲が再履修の課題となる。

再履修においてピ特の内容から変化した点は、次の2点である。

第一に、合格ラインが『バイエル』終了から『バイエル』85番終了に引き下げられたことである。

第二に、履修者がチャート内の課題曲を終えた時点で、授業そのものを終えることができるという点である。

さて、ここでピ特=再履修に対する学生の心情についても考えてみたい。

前期=春学期の試験に合格するということは、ピ特=再履修の受講を免れるということである。好意的に捉えれば、ピ特=再履修対象者は前期=春学期に単位が認定された学生の2倍の時間、後期=秋学期にピアノのレッスンを受けることができると言えるのであるが、見方を変えれば単位が認定された学生よりも1コマ分、余分に時間を拘束されると捉えることもできる。ピ特=再履修は、本来的にはピアノの初心者や習得に時間のかかる学生をサポートする制度として位置付けられるものであるが、「単位認定不可を受けた学生対象の授業」という性格が、「ペナルティー」的な印象を学生にもたらしている可能性も否定できない。

これらの否定的な解釈に鑑みると、入学時に、ピ特=再履修が見込まれる学生を如何にして合格ラインまで引き上げていくか、ということが、基ピ=音基の担当教員にとっての大きな指導目標の一つとなっていたように思われる。

さらにH26年生に関しては、教育課程におけるGPA制度の影響についても看過することができない。これはH18年生の時代には採用されていなかった制度である。

GPAとは、成績を5段階のGrade Pointで評価し、そ

の獲得ポイントの合計を履修登録単位の総数で割って算出した、1単位あたりの成績の平均値である⁹⁾。本学ではGPA値を卒業判定や教育実習・保育実習への参加、次学期の履修登録単位数の上限値、奨学金採用者決定、必修ゼミ決定の際の選考等に活用している¹⁰⁾。単位認定不可の科目が多くなると必然的にGPAの値は下がり、その場合、当該学生については「教育実習Ⅰ」「保育実習Ⅰ」の履修の可否において、大きな影響が生じてしまう。

以上を踏まえると、音基における単位認定不可の学生、すなわち再履修対象者の数を最小限に抑えることが音楽科目担当者にとって一層の責務となった。そのための対策として、開学2年目に「音楽演習（基礎）到達目標学習チャート」を作成し、施行するに至ったのである。

3.3.3. ピアノ進度の検証と比較

先の2つの項を踏まえ、続いて前期＝春学期終了時（7月）のピアノ進度の実態について検証を進めたい。

H18年生については西海ほか（2007: 40-42）において

すでに考察がなされているが、H26年生との比較を前提としつつ、本稿で改めて触れておきたい。

以下、表4にH18年生の入学時と前期「基礎音楽（ピアノ実技）」終了後の進度の比較を示す。

表4は、西海ほか（2007: 41）による表3のデータを基に、体裁の変更や項目の追加を施したものである。西海ほか（2007）では、初級、中級、上級の3つの括りによる考察が記されており、初級者の減少と中級者・上級者の増加をもって、“全員の学生が入学時よりも上達したことが確認できる”としている。

前述の通り、基ピでは前期試験の合格基準を「バイエル終了」としていたため、表4で見れば前期終了後も初級に留まっていた31名（39.7%）の学生が皆不合格となっていた。これらの学生がすなわち、ピ特の受講対象者である。また視点を入学期に移してみると、H18年生については、入学の時点で初級に該当していた学生（41名）がピ特の受講見込者であったと言える。前期終了後には初級該当学生が31名に減少していることから、単純に考

表4 H18年生：入学時と前期「基礎音楽（ピアノ実技）」終了後の進度の比較

グレード	進度	入学時	ピ特 ¹¹⁾		
			受講見込者 合格見込者	前期 終了後	受講対象者 合格者
初級	1. 学習経験なし～バイエル44番	13 (16.7)	41 (52.6)	1 (1.3)	31 (39.7)
	2. バイエル45番～65番	8 (10.3)		5 (6.4)	
	3. バイエル66番～84番	10 (12.8)		16 (20.5)	
	4. バイエル85番以上	10 (12.8)		9 (11.6)	
中級	5. 『ブルグミュラー25の練習曲』程度	19 (24.4)	37 (47.4)	27 (34.6)	47 (60.3)
	6. 『ソナチネ』前半程度	15 (19.2)		15 (19.2)	
上級	7. 『ソナチネ』後半以上、『ソナタ』程度	3 (3.8)		5 (6.4)	
計			78		78

表5 H26年生：入学時と春学期「音楽演習（基礎）」終了後の進度の比較

グレード	進度	入学時	再履修見込者		再履修対象者 合格者
			合格見込者	春学期 終了後	
初級	1. 学習経験なし～バイエル44番	45 (41.7)	68 (63.0)	1 (0.9)	18 (16.7)
	2. バイエル45番～65番	20 (18.5)		3 (2.8)	
	3. バイエル66番～84番	3 (2.8)		14 (13.0)	
	4. バイエル85番以上	10 (9.3)		30 (27.8)	
中級	5. 『ブルグミュラー25の練習曲』程度	20 (18.5)	40 (37.0)	40 (37.0)	90 (83.3)
	6. 『ソナチネ』前半程度	7 (6.5)		13 (12.0)	
上級	7. 『ソナチネ』後半以上、『ソナタ』程度	3 (2.8)		7 (6.5)	
計			108		108

・「春学期終了後」のデータは、平成26年（2014年）7月25日の春学期期末試験終了後、担当教員4名（葛西、多賀、今川、嶋田）によって集計されたものである。

えればピ特受講見込者のうちの10名が、半期の授業によって合格ラインを超える成長を遂げたと言える。表4は、以上に鑑みて入学時、前期終了時の双方について、合格ラインによる分類(二重線の区切りによる)を試みたものである。

続いてH26年生の場合について見ていきたい。表5にH26年生の入学時と春学期「音楽演習(基礎)」終了後の進捗の比較を示した。

音基では「バイエル85番終了」を合格ラインとしているため、基ピとは異なってグレード4(初級)の学生も合格(見込)者となっている。

入学時、再履修見込者は68名(63.0%)を数えていたが、春学期終了時、実際に再履修対象者となった学生はわずか18名(16.7%)である。すなわち、H26年生については50名(46.3%)もの学生が春学期の期末試験に合格し、再履修を免れた訳である。

この結果を極めて単純に比較すれば、H18年生では39.7%(31名)もいたピ特受講(=再履修)対象者は、H26年生では16.7%(18名)まで減少しているのである。

3.3.4. ピ特受講/再履修見込者(4月)の合格率の検証

それでは、H18年生との比較におけるH26年生の再履修対象者の減少は、一体何を意味しているのだろうか。

再履修者の減少は、換言すれば春学期期末試験合格者の増加ということになる。この背景にあるのは3.3.1.に述べた「音楽演習(基礎)学習チャート」の存在である。

「音楽演習(基礎)学習チャート」の運用、ひいてはその運用による音基の授業運営のあり方や課題を検討するに当たって、データの比較考察の終わりにもう一つ視点を提示しておきたい。

既に述べてきたように、H18年生とH26年生では合格ラインの設定に相違があり、当然ながらピ特受講/再履修対象者の人数を論点としてそれらを単純に比較することは、あまり意味を成さないように思われる。

そこで入学時(4月)から前期/春学期(7月)にかけてのピ特受講/再履修(見込)者数の変化を、期末試験の合格率という観点から考察することで、基ピ、音基それぞれにおけるピアノ初心者学生の成長の実態を改めて検証してみたい。

ピ特受講/再履修見込者の合格率は以下の式によって算出するものとする。

$$\text{ピ特受講/再履修見込者(4月)の期末試験合格率(\%, 小数点第2位以下は四捨五入)} = \frac{(\text{ピ特受講/再履修見込者数(4月)} - \text{ピ特受講/再履修対象者数(7月)}) \div \text{ピ特受講/再履修見込者数(4月)} \times 100$$

また合格率については、双方の合格ラインによる実際の数値と共に、互いの合格基準を入れ替えて適用した場合の仮の数値も算出して比較を試みる。

以下、表6を参照されたい。

表6 ピ特受講/再履修見込者数(4月)の期末試験合格率(%)の比較

	H26基準(易しい)	H18基準(厳しい)
H26年生	73.5	38.5(仮)
H18年生	29.0(仮)	24.4

実数を見てみるとH18年生が24.4%、H26年生が73.5%と、圧倒的にH26年生の合格率が高いことがわかる。より基準の易しいH26年生の合格率が上回ることは、当然と言えば当然である。

しかしながらH26年生の結果をより基準の厳しいH18年生の基準に当てはめてみると、数値こそ38.5%と激減するものの、H18年生の値(24.4%)に比べると、やはりそれを上回っていることがわかる。反対にH18年生の結果をより易しいH26年生の基準に当てはめてみると、その仮の合格率は29.0%となり、実数からわずか4.6%しか上昇しない。

つまり「音楽演習(基礎)学習チャート」に基くH26年生の音基の授業では、実際の合格者数の増加のみならず、8年前に比して、(ピ特受講=)再履修見込者の合格率の上昇をもそのねらいの中を含んでいると考えることができるのである。

3.5. 比較考察のまとめ

最後に、これまでの比較考察について整理しておきたい。

まず入学時のピアノ学習経験については、特に表4のグレード1「学習経験なし~バイエル44番」に分類された学生に明らかな増加が見られた。H18年生では16.6%に過ぎない割合であったものが、H26年生は41.7%となっており、その変化は2倍を優に超えるものであった。

そのような学生の実態においても、使用する教材に大きな変更はなされていない。しかしながら、特に初級者が使用する『バイエル』については「音楽演習(基礎)学習チャート」を作成して課題曲を選抜、また担当教員の違いにかかわらず全学生に適用することで、全体の到達目標の平準化が試みられた。

H18年生では前期の合格ライン、すなわち単位認定基準が「『バイエル』終了」に設定されていたが、H26年生では「音楽演習(基礎)学習チャート」に基き、春学期の単位認定基準が「『バイエル』85番終了」へと引き下げられた。その結果、当然ながら前期=春学期(H18年

生の場合は前期) 終了時点での合格者(単位認定者)は、H18年生が37.0%であったのに対し、H26年生では83.9%と大幅に増加した。

更に入学時点での(ピ特受講=)再履修見込者の合格率に限定して検証したところ、これに関してもH26年生において合格率の明らかな上昇が確認された。

前期=春学期期末試験での不合格者は単位認定不可となり、後期=秋学期には「ピアノ特別レッスン」=「音楽演習(基礎)再履修」という特別に開講された授業を受けなければならない。その中で前期=春学期のうちに達成できなかった課題を終えることで、単位の遡及認定が可能となるのであるが、その対象者となることは、学生にとっては不本意であることに違いはない。

つまりH26年生における春学期期末試験での合格率の上昇、すなわち単位認定者の増加は、学生のモチベーション向上という観点において一役買っている可能性が考えられるのである。

翻って指導する担当教員の立場からデータを再検証してみると、H18年生の場合もH26年生の場合も、合格ラインすれすれに属する学生数が、他のグレードに比して多い傾向にあることがわかる¹²⁾。これはH18年生、H26年生の相違を問わず、ピ特受講=再履修見込者を指導する担当教員は、何とかしてその学生を合格ラインまで引き上げていこうと努めていたことの、一つの現れであるように思われる。

H18年生の時代には、基ピの始めにクラス全体で10分間の「手遊びの時間」が設定されていたが、これは実習を間近に控えるH18年生にとっては必要な学びであったと考えられる。一方、4年制大学における1年生(H26年生)は実習までにまだ時間の余裕があるため、初年次春学期の90分間を丸々ピアノの個別指導に当てることが可能となった。これには授業運営としてプラスの効果が期待できるように思われるが、入学時のピアノ未経験者の激増を考えると、現在はH18年生の時代以上に個別指導に当てる時間や労力が必要とされているように思われる。つまり短絡的に、個別指導可能時間の増加が指導の充実化につながっているとは言い難い状況にあるように思われる。

また、学生の現状や教育課程全体を考慮した上での最善策として実施しているとは言え、「音楽演習(基礎)学習チャート」の施行による合格基準の引き下げや、合格後の授業出席を免除するという再履修の授業運営は、H18年生に比してH26年生の学習時間を減少させているおそれがある。これは音楽技術の習得において、芳しくない影響を与えかねない問題である。

この観点から、今後の音楽授業科目におけるH26年生の動向について、更に検証を継続していく必要があると

考えられる。

4. おわりに

本稿では、短期大学時代(H18年生)と現在の本学(H26年生)における音楽授業科目、特に初年次のピアノ教育について比較考察を行った。その中で得られた現状とその課題に対する知見は、より良い保育者養成を目指して近い将来に改善を企図している、本学の音楽カリキュラムツリーのあり方を検討していく上で、大いに有用であると考えている。

本稿での検証内容は、前述の通り、(読譜力を含めて)基礎的な鍵盤楽器の演奏能力を習得するための、初年次の音楽授業科目に的を絞ったものであった。これは保育者を目指す学生の音楽学習にとっては、まだまだ入り口に過ぎないものである。

すなわち、保育者には、ピアノを始めとする鍵盤楽器演奏だけでなく、幼児に歌の素晴らしさを伝えられる力、幼児が親しみを持てるような楽器を通して、共にアンサンブルを楽しむ力、更には創造的な音楽活動へのいざない等、実に幅広い音楽能力が求められるのである。

ここで認識を誤ってはならないのは、保育者を目指す学生に求められているのは高度な音楽的専門性ではないということである。むしろ、最も大切なことは、幼児の音楽表現に共感し、それを発展、伸長させることのできる柔軟かつ豊かな感性を備えながら、基礎的な音楽の技術を着実に習得していくことである。

現行のカリキュラムによる学生の音楽表現技術の習得をより正しく把握、検証していくために、引き続きH26年生の音楽授業科目について、その実態を調査、分析していくことを今後の研究課題としたい。

引用及び参考文献

- 小林美実(1982)、「保育者養成短大に於ける音楽関係授業科目について—本学における考え方と改革の試み—」、『宝仙学園短期大学紀要』7、9-19。
- 小島弘章(1989)、「保育者養成校における「音楽実技」の一試み—宝仙学園短期大学からの報告—」、『宝仙学園短期大学紀要』14、13-40。
- 西海聡子ほか(2007)、「保育者養成校における器楽(ピアノ)教育」、『宝仙学園短期大学紀要』32、33-43。
- 西海聡子ほか(2008)、「保育者養成校における器楽(ピアノ)教育(2)—初心者における弾き歌いの難しさとその改善の試み—」、『宝仙学園短期大学紀要』33、37-50
- 坪野春枝(2013)、『たのしく学べる 学生の楽典教室(解答編付)』、ケイ・エム・ピー kmp

注

- 1) こども教育宝仙大学 発行『入試ガイド2015』: 1.
- 2) 文部科学省「幼稚園教諭免許状・保育士資格取得に要する最低単位数」、インターネット (2014年11月7日にアクセス、ダウンロード)、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/008/siryō/04030501/003/001/001.pdf
- 3) その一環として、本学ではオープンキャンパス・入試相談会の際、希望者に対して「初学者のためのピアノレッスン」を行っている。H26年生の募集期間に当たる2013年度には7月14日、7月28日、8月4日、8月24日の4回、実施した。
- 4) 西海ほか(2007)では、34頁表1の科目名が「基礎音楽」とされているのに対し、本文の項目では「3-1.「基礎技能」(下線は筆者)と記されている。前者「基礎音楽」が正しい科目名であり、「基礎技能」は誤謬である。
- 5) 担当学生の総数は20~22名とされており、換算すると1人の教員は1科目当たり2コマの授業を受け持っていたようである。
- 6) これは西海ほか(2007)からの引用であるが、手遊びの時間が保育所・施設における「保育実習」の対策に限ったものであるのか、もしくは幼稚園における「教育実習」をも含む概念として考えられていたのかは不明である。いずれにせよ、手遊びの習得とレパートリーの獲得は、双方の実習に有用である。
- 7) 出典は、大学音楽教育グループ(1977(第42刷:2011))、『教職課程のための大学ピアノ教本~バイエルとツェルニーによる展開~』、教育芸術社。プリント楽譜集の課題終了後、学生は「音楽演習(基礎)学習チャート」のステップ2へ移行する。このことを踏まえ、本プリント楽譜集では『バイエル』47番以前の曲の中から、主に左手部分を高音部譜表から低音部譜表に書き直されているものを選抜し、編纂している。
- 8) 例えば左右でリズムが相違する88番、あるいはチャート内の曲にはない短調を学ぶことのできる91番や93番、手の交差を学ぶ100番等。
- 9) こども教育宝仙大学 発行『授業ハンドブック2014』: 13
- 10) 前掲書、49-50
- 11) 本文中にも断っているが、「ピアノ特別レッスン」の略である。
- 12) H18年生(表4)はグレード5の34.6%が全体比較で1位、H26年生(表5)はグレード4の27.8%が全体比較で2位である。